

〔倭訓栞多編十三〕たかる 新撰字鏡に曠をよめり、高笑の義也、今たかわらひといふめり、

〔類聚名義抄〕啾音於 啾正

〔名物六帖人事四〕此堂宋元懷拊掌錄、賓主爲 轟笑幽棲志、宋景濂、猗、祥 大駮拊掌錄、滿

〔運歩色葉集登〕啾啾

〔平家物語九〕宇治川の事

はたけ山いつもわ殿原がやうなるものは、しげ忠にこそ、たすけられんすれといふまゝ、大ぐしをつかんで、きしの上へぞなげ上たる、なげ上られて、たゞなをり、たちをぬひてひたいにあて、大をんぢやうをあびて、むさしの國の住人大ぐしの次郎しげちか、うち川のかちだちの先陣ぞやとぞ、名のつたる、かたきもみかたも是を聞て、一度にとつとぞわらひける、

〔書言字考節用集入辭〕駮然 阿々同 同言九 啾啾 啾啾

〔倭訓栞後編五〕から略中 から略 わらふと云は、阿々大笑の義也、高くさやかに笑ふ也、

〔平家物語十一〕せんでいの御入水の事

女房たちや、中納言殿知盛 いくさのやうはいかにやいかにととひ給へば、只今めづらしきあづま男をこそ、御らんせられ候はむすらめとて、から略 とわらはれければ略下

〔大鏡八〕清範律師、犬のために法事しける人の講師に、しやうせられていくを、清昭律師同定の説

法者なれば、いかゞするときに、かしらつゝ、みて、たれともなくて、聽聞しければ、たゞ今や過去聖靈は、蓮臺のうへにて、ほとほえ給ふらんと、の給ひけるを、さればこそ、こと人はかく思ひよりなましや、なをかやうのたましぬある事は、すぐれたるみはらぞかしとこそほめ給ひけれ、まことにうけ給はりしに、おかしくこそ侍りしかさ 據一本改 すれば又聽聞衆どもさ とわらひてまかりかへりにき、いと程々なる往生人なりや、